

日に世界中で二〇億杯が消費されるというコーヒー。実は一次産品として

は石油にも匹敵する巨大市場を形成し、そのおよそ四割をブラジルが生産する。ブラジルのコーヒーの起源は一七二七年にさかのぼり、フランス領ギアナから一本の苗木が持ち込まれたことが発端と言われている。その後、瞬く間にコーヒー生産は拡大し、一九世紀初頭にはヨーロッパへの大量輸出がはじまった。膨大な富をもたらすこの赤い果実は当時、赤いダイヤと称された。やがて生産の拠点はブラジル南東部のリオデジャネイロ州から内陸部の高原地帯へと移動し、サンパウロ州やミナスジェライス州が世界のコーヒー生産の中心となった。

サントスを後にした私は、次にコーヒー農園へと車を走らせた。向かった先はサンパウロの北およそ三〇〇キロ、ミナスジェライス州南部のアルフェナスだ。一帯は高度九〇〇メートルほどの高原地帯だが、春先にもかかわらず真夏のような日差しが降り注ぐ。幾つもの丘を越えた後に、突然、緑の大地が現れた。なだらかな斜面に沿って無数の低木が並び、幾重にもカーブを描いた畝が遠く地平線まで広がっている。国内最大規模を誇るこのイパネマ農園には、五五

(左)サンパウロ州のコーヒー農園にて。収穫した豆をふるいにかけて不純物を除外する。
(右) 1年にほんの数日だけ咲くコーヒーの花。ジャスミンのような甘い香りがする。
(下左・中) コーヒー生産の中心地、ミナスジェライス州の農園。ここではカップ・テイスティングを含めたグレーディングの作業も行い、世界各地へ直接コーヒーを輸出。
(下右) サントスの港には、現在もコーヒーを貯蔵する広大な倉庫が広がる。



AGORA
Special

〇〇ヘクタールの大地に一五〇〇万本のコーヒーの木が植えられている。

「とても幸運な時期にいらっしやいましたね。まずはお見せしたいものがあります」

そう言って作業員に案内された先には、群生するコーヒーの木々にうっすらと雪が積もっていた。「この暑さで雪？」と我が目を疑うが、実はこれは満開に咲いたコーヒーの花で、その可憐な姿が雪景色のように見えたのだ。「花の命は儂く、わずか二三日。こんな幻想的な光景は雨期のはじめにしか見られません」。受粉した花は実を結び、やがてたわわにコーヒーの果実を実らせる。

「我々の畑は、『コーヒー・ベルト地帯』と呼ばれるブラジルで最も栽培に適した土地にある」

そう説明するのはイパネマ農園の社長、ワシントン・ロドリゲス氏だ。

「この地では年間降雨量が一四〇〇ミリを超えるにもかかわらず、冬場にはほとんど雨が降りません。この極端な気象条件が花の開花を一瞬に集約させ、その結果、果実が均一なタイミングで実ります。粒の揃った完熟豆を一気に機械で刈り取り、高品質のコーヒーを採取できるのです」

一方、収穫された果実は果皮や

